

2019. 3. 15

ウェーブ

時評



田中 均

外交官 埴原正直

たなか・ひろし 69年京大法卒。外務省経済局長、アジア大洋州局長、外務審議官を経て（参）日本総研国際戦略研究所理事長（公財）日本国際交流センターシニア・フェロー。

先日、友人が埴原正直という1920年代の日本の外交官の話をしてくれた。43歳という若さで外務省の次官、その後駐米大使と異例の出世を遂げた人物だ。ワシントンで多くの友人を作り、リベラルな思想を持った外交官として好かれたようだ。しかし、私自身も外交官として米国に勤務し、埴原と同じサンフランシスコ総領事であったにも関わらず、恥ずかしな

も語られなくなったのには理由がある。埴原は日米関係の重大問題となっていた排日移民法の成立を阻止すべく懸命の努力をしたが、努力虚しく1924年移民法は成立してしまふ。埴原の外交努力の中で埴原がヒューズ國務長官にあてた書簡の中に排日条項が成立することを阻止できなかったことについて自己弁護をするようなことはしなかった。米国知識人からは人種差別的な移民法の誤りを懸命に指摘した埴原の努力を多とする言論が相次いだ。日本国内で埴原を評価する声は少なかつた。

私がつりわけ心を打たれたのは埴原の外交官としての生き方だ。外交官はどの時代でも相手国と直接の接切り結び、「国を背負う」という使命感を最も感じる職業であると思う。ただ、外交には大きな国際関係の流れを味方にならないと結果が残せない場合も多い。しかし仮に結果が残せなかったとしても、使命感に基づく行動をとっていたならば、決して自己弁護をしようとは思わないだろう。

今日の世相は当時の米国や日本の雰囲気似ている。トランプ大統領を生んだ背景には所得格差や移民の流入に対する強い不満と既成の政治家に対する反発がある。日韓関係悪化の背景には韓国の文在寅政権のポピュリスト的傾向と日本の反韓ナショナリズムがある。そのような雰囲気が高まってくると、非合理なことが通ってしまふ危険がある。この時代において、外交官の人たちがポピュリズムの渦に巻き込まれることなく、自己保身に走ることなく、確固とした使命感を持って活躍してくれることを心から願いたいと思う。

埴原が日本で歴史の一端として

と云った趣旨だったのがわかる。駐在員でいたベルでスパイ容疑に問われ、米人捕虜との交換要員としてテキサスの日系人強制収容所に移され生活した経験があった。さらに、99年にカリフォルニア州議会で歴史問題に絡んで日本に謝罪要求決議が上程された際、これを阻止しようと決議案を主導したマイク・ホンダ議員と何時間も直談判をした経験がある。決議案を阻止することは出来なかったが、それが故に埴原の思いはよくわかるような気がする。

埴原の外交官としての生き方だ。外交官はどの時代でも相手国と直接の接切り結び、「国を背負う」という使命感を最も感じる職業であると思う。ただ、外交には大きな国際関係の流れを味方にならないと結果が残せない場合も多い。しかし仮に結果が残せなかったとしても、使命感に基づく行動をとっていたならば、決して自己弁護をしようとは思わないだろう。